23l-am07

代表的８疾患の効果的実習に向けた実習前調査及び実施状況調査に基づく検証（第３報）

○岩田 紘樹[1,2], 鈴木 小夜[1], 地引 綾[1], 横山 雄太[1], 河添 仁[1], 小林 典子[1,2], 藤本 和子[1], 早川 智久[1,3], 山浦 克典[1,2], 望月 眞弓[1,3], 中村 智徳[1]（[1]慶應大薬，[2]慶應大薬局，[3]慶應大病院薬）

【目的】改訂モデル・コアカリキュラムの実務実習では、薬局・病院・大学が連携して、代表的８疾患の体験型実習を実施することが求められている。我々は2017年度学生25名を対象に、代表的８疾患に関する施設への事前調査及び学生による対応患者数のカウントが実施可能であることを示した（日本薬学会第 138 年会にて報告）。2018年度は対象を全学生160名に拡大し、事前調査結果と実際の実施状況の関連性を評価するとともに、本取組みの連携に向けた有用性を検証する。

【方法】①2018年度本学５年次生160名の受け入れ施設である149薬局及び47病院に、Ⅰ期実務実習開始前に調査票を郵送し、代表的 8 疾患の服薬指導実習の実施可否を調査した。②実務実習期間中に実施した服薬指導日を、学生自身が代表的 8 疾患記録シート（以下、記録シート）に疾患ごとに記載した。Ⅰ期の記録シートはⅡ期実務実習初日に学生から指導薬剤師へ提出した。実務実習終了後に服薬指導件数を集計した。

【結果・考察】無回答等を除き、学生 153 名の記録シート及び実習先 142 薬局、46 病院の事前調査票を解析対象とした。事前調査において８疾患全て「実施可」の施設は薬局31.0%、病院67.4%に留まったが、学生ごとに薬局及び病院の事前調査結果を合わせたところ、全ての学生において、８疾患いずれも「実施可」または「状況により可」となった。一方、薬局及び病院実習を通して90.2%の学生は５疾患以上で服薬指導を経験したが、8 疾患全てを経験した学生は 45.8%に留まった。疾患毎の服薬指導実施率は、高血圧症（96.1%）や糖尿病（94.1%）で高かったのに対し、脳血管障害では61.4%に留まり、服薬指導の機会を学生に与える難易度が疾患により異なることが示唆された。